

東京アマデウス合唱団

第25回定期演奏会

Jan Dismas Zelenka(1679~1745)

(ヤン・ディスマス・ゼレンカ)

聖週間(洗足木曜日)のためのレスポンソリア

死者のための聖務曲集

Leonhard Lechner(1553~1606)

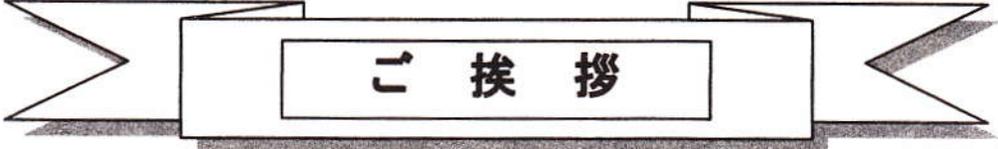
(レオンハルト・レヒナー)

イエス・キリストの受難と苦悩の物語(ヨハネ受難曲)

Tokyo Amadeus Chorus

カトリック麻布教会

2006年11月3日



ご挨拶

本日はお忙しい中をご来場いただき、厚くお礼申し上げます。

今年は、没後400年を記念し、レオンハルト・レヒナーの曲から、
現在楽譜が絶版となっているものの、後世の作曲家が受難曲作成の
お手本にした「キリストの受難と苦悩の物語」と、レヒナーと同様日本
では演奏されることの少ない、ヤン・デスマス・ゼレンカの作品を
選んで演奏することと致しました。

昨年一昨年に引き続き、今回もカトリック麻布教会からの深甚なる
ご好意とご配慮をいただき、この素晴らしい礼拝堂で演奏できます
ことを団員一同心から感謝しております。

水野先生の懇切なご指導と、練習ピアニストの堀江和子さんのオル
ガンに加え伊藤恵以子さんのチェロという素晴らしい伴奏に助けられ、
また皆様方からの暖かい励ましにも支えられて、この演奏会を開催で
きることを、団員一同大変喜んでおります。

この荘厳な礼拝堂の、素晴らしい響きと雰囲気、心置きなく
お楽しみいただければ幸いです。

東京アマデウス合唱団 団長 柿沼 哲

PROGRAM

第1ステージ

ヤン・ディスマス・ゼレンカ(1679~1745)

Jan Dismas Zelenka

□聖週間(洗足木曜日)のためのレスポンソリア(ZWV55)より

『*Responsorialia pro hebdomada sancta*』

- 我が友は
Amicus meus
- 極悪の商人ユダは
Judas mercator pessimus
- 我が弟子の一人は
Unus ex discipulis meis
- 民衆の長老らは
Seniores populi

□死者のための聖務曲集(ZWV47)

『*Drei Responsorien zum Toten offizium*』

- 私は信じます。救い主が生きていることを
Credo quod Redemptor meus vivit
- ラザロを復活させた御方
Qui Lazarum resuscitasti
- 主が現れる時
Domine, quando veneris

休 憩

第2ステージ

レオンハルト・レヒナー(1553~1606)

Leonhard Lechner

我らが唯一の贖い主にして救い主なるイエス・キリストの受難と苦悩の物語
(ヨハネ受難曲)

『*Historia der Passion und Leidens unsers einigen Erlösers
und Seligmachers Jesu Christi*』

(選曲 辻村順子)

PROFILE

指揮 水野克彦



東京藝術大学卒業。
ピアノを滝崎鎮代子、クラリネットを千葉国夫、
室内楽を細野孝興の各氏に師事。
オルガンの手ほどきを今井奈緒子氏に受ける。
藝大バッハカンタータクラブに在籍中、小林道夫氏の
薫陶を受ける。日本オルガニスト協会会員。

チェロ 伊藤恵以子



東京藝術大学卒業。同大学院博士課程修了。チェロを
三木敬之、レーヌ・フラショー、倉田澄子の各氏に師事。
パリ・エコールノルマルで学ぶ。
第48回日本音楽コンクール入選。
Ensemble Delice のメンバー。

オルガン 堀江和子(兼練習ピアニスト)



武蔵野音楽大学短期大学部ピアノ科卒業。
キリスト教音楽学校パイプオルガン科卒業。
同研究課程修了。ピアノを水本雄三、野村文子、
オルガンを高橋靖子の各氏に師事。
現在、茗荷谷キリスト教会オルガニスト・聖歌隊伴奏者、
日本オルガン研究会会員。

東京アマデウス合唱団

ソプラノ 辻村順子・松木香織

アルト 伊藤正子・大久保ルミ子・大友美佐・
小川由美子・宮崎米子

テノール 小沢 仁・片岡 繁

バス 柿沼 哲・野口 碩



今回の演奏曲目について

ヤン・ディスマス・ゼレンカ (Jan Dismas Zelenka) :

『聖週間のための 27 のレスポンソリウム集』

(Responsorias pro hebdomada sancta ZWV55) より

「聖木曜日のためのレスポンソリウム」(Die Responsorien zum Gründonnerstag)

バッハと同時代のバロックの作曲家ヤン・ディスマス・ゼレンカ (1679.10.16 – 1745.12.23) の生地であるチェコのプラハ近郊のロウノヴィツェ (Lounovice) は、当時はオーストリアの一部のような都市で、16 世紀ドイツの神聖ローマ帝国の影響を強く受けていた。父イジー (Jiřík Zelenka) は教師兼オルガニストで、教会では先唱者も務めた。ゼレンカの初期の音楽教育はこの父とおそらくプラハの Clementinum 神学校 (イエズス会) によるものと考えられている。1710 年 (または 1711 年) ザクセンの首都ドレスデンの宮廷楽団のヴィオローネ奏者になり、1716 年から約三年間ウイーンに留学して対位法の大家ヨーハン・ヨーゼフ・フックス (Johann Joseph Fux) に師事した後、1719 年頃ドレスデンに戻って宮廷楽団のコントラバス奏者に成り、作曲も行っていた。1723 年にプラハでオーストリア皇帝カール六世の即位の式典が行われたのを期に、ゼレンカは宮廷礼拝のための音楽の作曲チームの一人に加わり、生涯に 250 曲以上の宗教曲を遺すことになる。この『聖週間のための 27 のレスポンソリウム』はその転機が訪れる前の 1723 年に作られた作品で、そのうちの「聖木曜日のためのレスポンソリウム」の部分から今回 4 曲を演奏する訳である。このレスポンソリウム集は受難週の聖木曜日の朝真夜中に行われる聖務日課で詩編唱、聖書朗読とともにセットにして行われる、朗読された聖書の言葉に対する応唱モテットだけを集めたもので、1-9 は聖木曜日、10-18 は聖金曜日、19-27 は聖土曜日のための朝課の宵課 (Nokturn 夜課ともいう) という構成になっている。

Amicus meus は聖木曜日の第 2 宵課で歌われた四番目のレスポンソリウム(答誦)で、マタイによる福音書第 26 章 48-49 「イエスを裏切ろうとしていたユダは、『わたしが接吻するのが、その人だ。それを捕まえろ』と、前もって合図を決めていた。ユダはすぐイエスに近寄り、『先生、こんばんは』と言って接吻した。」という聖書の言葉とマタイ 27 章 3-5 「イエスを裏切ったユダは、イエスに有罪の判決が下ったのを知って後悔し、銀貨三十枚を祭司長たちや長老たちに返そうとして、『私は罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました』と言った。しかし彼らは、『我々の知ったことではない。お前の問題だ』と言った。そこで、ユダは銀貨を神殿に投げ込んで立ち去り、首をつって死んだ」という記述に基づいている。その前に朗読される言葉は聖アウグスチヌスの詩編 55 (ラテン語表記 54) の冒頭部分に基づく執り成しの祈りである。この応唱の言葉はイエスの目で御自分を裏切ったユダを語っている。聖務日課としては、深い悩みと不安のなかにおののく私たちの魂が、親愛を装って自分を死へと導こうとする狡猾な敵の脅威を覚えて神を呼び求めて祈るとい

う流れが背景になっている。歌詞の各部分に置かれている旋律は多くの場合グレゴリオ聖歌を想起させるように作られてある。グレゴリオ聖歌では《Bonum erat ei, si natus non fuisset homo ille.》「彼のような人間は生まれなければ、彼にとってよかったのに。」は先唱者が独唱で歌う。《Infelix praetermisit pretium sanguinis, et in fine laqueo se suspendit.》「不幸な友は血の代価をそのままにして、とうとうわなで自分の首を吊ってしまった。」の部分が反復されるのは、キリストを裏切り、彼を十字架に再びつけようとする行為が自殺行為であって、その運命が死であることを強調している。

Judas mercator pessimus は聖木曜日の第2宵課で歌われた五番目のレスポンソリウムで、マタイによる福音書第26章15「『あの男をあなたたちに引き渡せば、幾らくれますか』と（ユダが）言った。そこで、彼らは銀貨三十枚を支払うことにした。」という記述とすでに引用した26章49の記述に基づいている。この曲でも、《Melius erat illi, si natus non fuisset.》「生まれなければ、彼にとってもっとよかったのに。」という言葉が詩編風に際立たせてあり、グレゴリオ聖歌では独唱者が歌う部分である。そのあと、ユダの裏切りの行為が《Denariorum numero Christum Judaeis tradidit.》「ユダヤ人の救い主を数デナリの銀貨と引き換えに引き渡したのだ。」と反復強調される。世のキリスト批判に加担する人間の愚かさが、イエスを裁こうとする者たちに自分の主を売り渡したユダの心に象徴されるのである。音楽の形式としてはABA'B'A"で反復される旋律フレーズのAがユダの裏切りを語り、Bがキリストのユダに示した憐れみの振舞いとその思いを言葉にしている。

Unus ex discipulis meis は聖木曜日の第2宵課で歌われた六番目のレスポンソリウムで、マタイによる福音書第26章21にイエスが弟子たちに言われた「はっきり言うておくが、あなたがたのうち一人がわたしを裏切ろうとしている」という言葉に基づいている。この曲にも反復して現れる《Melius erat illi, si natus non fuisset.》「生まれなければ、彼にとってもっとよかったのに。」は、実はこの典拠のすぐあとイエスが言われる第26章24の言葉「人の子を裏切るそのものは不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった。」を引いているのである。グレゴリオ聖歌で独唱者の歌うのは、裏切者がユダであることを示唆する言葉《Qui intingit mecum manum in paropside, hic me traditurus est in manus peccatorum.》「男は私と一緒に手を小さな皿に浸している。その罪の手で私を引き渡そうとするのであろう。」である。ユダと名指していないことが、キリストを裏切るのは私たちではないかという不安を祈る者に覚えさせる。例によって、《Melius erat illi, si natus non fuisset.》とこの曲のテーマである《Unus ex discipulis meis tradet me hodie.》「私の弟子の一人が今日私を引き渡すであらう。」の言葉が、旋律を展開させた形で反復される。

Seniores populi は同じ朝課の第3宵課で歌われた九番目のレスポンソリウムで、マタイによる福音書第26章3-4の「祭司長や長老たちは、カイファという大祭司の屋敷に集まり、計略を用いてイエスを捕らえ、殺そうと相談した。」という記述と、同55のイエスが「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか」と言われる言葉に基づいている。この曲のグレゴリオ聖歌で独唱者が歌うのは、《Collegerunt pontifices et

pharisaei concilium.》「祭司長とファリサイ派が結合を図ったのだ。」という部分である。ヨハネによる福音書第 11 章 49-50 によれば、カイファはファリサイ派の人々に向かって「あなたがたは何も分かっていない。一人の人間が民の代わりに死に、国民全体が減びないで済む方が、あなたがたに好都合とは考えないのか」と言ったという。果たしてキリストは全人類の代わりに十字架にかかってその罪を贖われた。それを「好都合」と考えるのか、それとも自分のために尊い犠牲となってくださったと考えるのか、理性を振りかざす現代の「ファリサイ派」とも言うべき自己中心な高ぶった私たちにこの言葉は鋭く問いかけることであろう。この歌詞のあと、《Ut Jesum dolo tenerent, et occiderent.》「いかに陰謀を以てイエスを拘束して、殺すかと、」《Seniores populi consilium fecerunt.》「人々の長老たちが協議をおこなった。」が繰り返される。

『葬儀のための 3 つのレスポンソリウム』(Drei Responsorien zum Totenoffizium ZWV47)

この曲が作曲された 1733 年という年は、時代がバロックから古典派に変わろうとしていた転換期に当たる。折からこの年 2 月ドレスデンの宮廷の主ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト I 世 (Friedrich Augustus I) が逝去した。この 3 曲の作品は死者のための聖務日課の朝課で歌われる 3 つの宵課に配分された 3 曲ずつ計 9 曲のレスポンソリウムのうち第 1 宵課で歌われたもので、自筆総譜の状態から (特に扉が切り取られている) 選帝侯の葬儀に際して二長調の Requiem ZWV46 とともに作曲されたとするのが定説である。

Credo quod Redemptor meus vivit は第 1 宵課の一番目の詩編第 5、第 6、第 7 の交唱のあとヨブ記 7 章 16-21 の朗読があり、それに対する応唱としてこの曲が歌われた。朗読されるヨブ記とこの歌詞は反対の精神内容を示していて、新共同訳は「もうたくさんだ、いつまでも生きていたくない。ほうっておいてください。わたしの一生は空しいのです。」とある部分をラテン語聖書は「私にかまわないでください。私の日々は空しいのですから」と語り出し、「なぜ、私の罪を取り除かず、なぜ私の不義を除き去らないのですか。見よ、今や塵の中に眠ろうとしているのです。」とヨブが訴えるのに対して、答誦の歌詞は自分を贖った救い主とともに塵からよみがえる復活の信仰を告白するのである。グレゴリオ聖歌で独唱者が歌うのは、《Quem visurus sum ego ipse, et non alius; et oculi mei conspecturi sunt.》「そのお方に私が自らお目にかかろうとすること、それ以外のことはありません。ですから、私の眼が見えるようになりますように。」とある部分で、この曲でも 3 重唱で歌うようになっている。

Qui Lazarum resuscitasti は第 1 宵課の二番目のレスポンソリウムで、ヨブ記第 10 章 1-7 の朗読のあと歌われた。ヨブの言葉が死者の魂のつぶやきを代弁しているとすれば、この歌詞はキリストに向かって執り成しを祈っていることに成る。グレゴリオ聖歌で独唱者が歌うのは《Qui venturus es judicare vivos et mortuos, et saeculum per ignem.》「あなたは来られて、生ける者と死せる者を、そしてこの世を、火によって裁かれようとしておられます。」の部分である。《Tu ei, Domine, dona requiem.》「主よ、この方に安息をお与えください。」の歌詞が、最初は女性二重唱で歌いおさめたあと、今度は四重唱で独唱部分

を挟んで二度繰り返して歌われる。この構成は、選帝侯の葬儀を考慮したものであろうか。曲全体がミサ曲 *Requiem* と同様の荘重な作りになっている。

Domine, quando veneris は第 1 宵課の三番目のレスポンソリウムで、ヨブ記第 10 章 8-12 の朗読のあと歌われた。この聖句はヨブが肉体を授けてくださった神の恩寵に感謝しながら、今塵に返そうとしている非情の理由を問い詰めている部分で、曲の歌詞はそれに呼応して、罪の赦しを叫び、兼て死者の安息を祈っている。グレゴリオ聖歌で独唱者が歌うのは、《*Commissa mea pavesco, et ante te erubescio*: 》「私のかずかず犯した罪の心は震え始め、あなたの御前で顔を赤らめようとしています。」と《*Dum veneris judicare, noli me condemnare*. 》「もし裁こうと願うのであれば、私を有罪にしないでください。」の部分で、本曲の后者の歌詞は聖歌風に歌われるが、ヴァチカンのグレゴリオ聖歌集に載るものとは違う旋律で歌われる。《*Quia peccavi nimis in vita mea*. 》「なぜなら、私は自分の人生のあいだに余りにも罪を犯したからです。」の部分は、グレゴリオ聖歌では会衆が歌う部分である。本曲でもその部分が反復されるのは、聖歌の構成を保存してあるのである。

レオンハルト・レヒナー (Leonhard Lechner) :

『私たちのいく人かの救い主であり、至福を与え下さる方イエス・キリストの御受難とお苦しみのお物語』 (*Historia der Passion und Leidens unsers einigen Erlösers und Seligmachers Jesu Christi BA2968* 『レヒナー作品集第 12』所収)

ドイツのルネサンス期の作曲家レオンハルト・レヒナー(c.1553-1606.9.6)は、その伝記については不明な点が多い。出身地はスイスの南チロルと推定されているが、それは彼が署名に姓を *Athesinus* と書くからであった。しかし、父母がその地方の出身であったとしても彼がそこで生れたという確証はない。1570 年にはバイエルン公の宮廷礼拝堂付聖歌隊の少年歌手に成っていた。はっきりしているのは 1575 年からで、ニュルンベルクの聖ローレンツ学園の助教師として登録されており、同時に《聖モテット集 *Motectae sacrae* 1575 年出版》を始めとするおびただしい数の世俗歌曲、マドリガーレ、宗教曲(マニフィカート、モテット、ミサ曲)の発表によって音楽家として周囲に認められていた。1584 年からは *Hechingen* の宮廷楽長の職に就くが、彼がルター派の作曲家であったために反改革を推し進める領主 *Eitel-Friedrich I* 世との関係が悪化し、わずか一年後にそこを去って *Württemberg* 公 *Wilhelm* の庇護を求め、まずテノール歌手として雇われ、1589 年に宮廷作曲家に、1594 年には宮廷楽長に任命された。この受難曲は 1593 年楽長就任の前年に受難週のために作曲されたもので、「ラテン語の古い教会コラールによって四声で作られた」という但し書きが付いている。

この曲は、16 世紀のヨーロッパの傾向として見られる特徴をそなえていて、15 世紀頃まで流行した単純な歌とポリフォニックな曲を交互に展開させる受難曲を改めて、ヨハネによる福音書のテキストすべてをモテットのようにポリフォニックな作りにしてある。そのため、聖書朗読と合唱による人間の声とアリアの告白とコラールが織り成すバッハの受難曲のような複雑な構成は見られない。聖書の朗読をポリフォニーで肉付けするのである。

幾分パート別に役割を与えながら、テキストの言葉を劇的にダイナミックに伝える工夫がなされている。

レヒナーは宗教曲のほかに世俗歌曲やマドリガルをたくさん遺して、日本ではむしろその分野の作曲家として知られる。その本領がこの曲でも発揮されていて、人文主義の時代を反映してテキストの音楽表現を人間的に描き出そうとする傾向が見られる。

第一部は福音書の第 18 章 1-8、10-13、19-24 のイエスの逮捕からハンナスの尋問を受けるまでの部分である。大祭司の義父ハンナス(新共同訳はアンナス)がイエスを尋問する部分は、新約聖書では表記の混乱が有って「大祭司」が尋問したと記されているが、受難曲のテキストはハンナスに修正されている。テノールの冒頭で歌う旋律が、本来福音史家(Evangelist)が歌う聖書朗読のモチーフである。しかし、この曲は必ずしも専らテノールに福音史家の役割を委ねようとしない。そのモチーフを歌うパートが福音史家の役割を代表するのである。作曲者はすぐれたテノール歌手であったので、テノールの使い方には非常に特徴があり、高音域を十分に利用して、語られるテキストの感情の高まりを激しく、際立つように表現する工夫が施されている。この第一部でも、イエスを逮捕しようとする人々とともにゲッセマネの園に現れたユダの裏切りの行動や動機を語る部分、逮捕する瞬間のイエスの質問に答えて人々の叫ぶ部分、ハンナスの尋問中下役がイエスに平手打ちをくわせる部分の語り与会話などはテノールの高音が効果的に使われている。バスは中世以来の受難曲がそうしたように、イエスが語るせりふの独唱的表現とその朗読的基礎を担う。ソプラノとアルトは対位法を駆使してポリフォニーの調和と美しさを支える役割に徹している。

テノールの冒頭で歌う旋律



第二部は福音書の第 18 章 25、28-30、33、36-40 (一部省略) の弟子のペトロが巻き添えを恐れてイエスを知らないと言ふ部分とイエスがローマの総督ピラトの尋問を受ける部分である。ペトロが三度イエスの仲間であることを否定したあと、主の予言が的中した自分の弱さに激しく泣く部分はマタイによる福音書第 26 章 74-75 の記述を挿入している。ペトロと人々の対話では、人々の語る言葉はテノールが朗読を受け持つが、ペトロの言葉の部分は朗読をソプラノに任せて、そのテノールが彼の慌てた興奮やそのとき鶏が鳴いた衝撃を激しく歌い、次の復唱で再び朗読のモチーフを受け持つという展開を見せる。イエスと尋問するピラトとの会話では、上二声乃至三声がピラト、バスまたは下二声がイエスの言行を語る。特に、バスの語り方はバッハにも影響を与えているようである。そこでは朗読のモチーフも部分的に現れる。ピラトが《Ich finde keine Schuld an ihm.》「私はこの男に何の罪も見出さない」という部分以下は、朗読のモチーフをアルトに譲って、バスがピラトの生々しい声を受け持ち、群衆の声は上三声が受け持つという構成になっている。

第三部は福音書の第 19 章 1-5 と 15-18 で、ピラトがイエスを鞭打たせたあと、祭司長たちに引渡し、彼等が「されこうべの場所」と呼ばれるところへ十字架を負わせて連行する部分である。この部分では、イエスが鞭打たれる部分、いばらの冠を彼の頭にいただく部分、人々が「十字架につけろ」と叫ぶ部分、ピラトがイエスを群衆に示す部分が特にリアルに表現される。《Weg,weg,weg!》「うせろ、うせろ、うせろ！」は聖書にはない。印象的なのは、ピラトがイエスを「お前たちの王」と言ったのに対して、祭司長たちが「私たちには国王は居りません。」と言う部分が、大きく表現されている点である。キリストの王権を否定した彼等の発言の重大さを強調するのである。イエスが十字架を運ぶ説明部分では、付点二部音符と四分音符による重い十字架を引きずる表現が施されていて、これはバッハも用いた手法であった。

第四部は福音書の第 19 章 19-20 のピラトが罪状書きを書いて十字架に掛ける部分である。レヒナーがこの部分だけを一楽章として取り扱っていることは注目し得る。福音書はその罪状書きが「ユダヤ人の王」とあるので、祭司長たちが「この男は『ユダヤ人の王』と自称した」と書き改めるようにピラトに要請したという部分が続くが、レヒナーはマタイによる福音書第 27 章 39-40 を用いて、罪状書きを見て首を振り振り、「神の子なら十字架から降りて来い」とイエスを侮辱する人々の言動の醜悪さを大きく描こうとする。この部分の群衆の声の主役はソプラノとテノールで、前者はどちらかと言えば朗読を、後者は生々しい人間の声を受け持つ。

第五部は福音書の第 19 章 26-30 の十字架上の息を引き取られるまでのイエスを描くが、レヒナーは十字架上のイエスが言われた七つの言葉を完備したテキストを作るために、ルカによる福音書第 23 章 34 の「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」と、同章 42-43 の共に十字架にかけられた犯罪人の一人に言われた「まことに、まことにあなたに言って置く。今日、あなたは楽園で私のそばに居るであろう。」と、マタイによる福音書第 27 章 46 の「エリ、ラマ、アサブターニ？（新共同訳「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」）」と、ルカによる福音書第 23 章 46 の「父よ、あなたの御手に私の霊をゆだねます。」を挿入した。これらの言葉は、バスがイエスの言葉を表現する主役になっている。このうちアラム語でイエスが言われる言葉の意味の説明部分は上三声で行われる。また、イエスをご自分の愛して来られた弟子(ヨハネ)を母マリアに紹介する部分は、主役をテノールに振り当てている。

結尾には《Der Du für uns gelitten hast, erbarme Dich unser, o Jesu!》「そのあなたこそ私たちのために苦しみを受けられたのです。私たちをお憐れみください、おお、イエスさま！」という言葉が付く。ここに語られる受難物語は、私たちの罪のためにキリストが苦しみを受けられたのだという啓示として受け取って欲しいというメッセージを託した祈りなのである。(文責：野口 碩)

歌詞対訳

Jan Dismas Zelenka

Die Responsorien zum Gründonnerstag (Responsorien pro hebdomada sancta ZWV55) Zweite Nokturn

Lectio IV - Resp.4

Amicus meus osculi me tradidit signo:

quem osculatus fuero, ipse est, tenete eum.

Hoc malum fecit signum,
qui per osculum adimplevit homicidium.

Infelix praetermisit pretium sanguinis,
et in fine laqueo se suspendit.

V.: Bonum erat ei, si natus non fuisset homo ille.

Lectio V - Resp.5

Judas mercator pessimus osculo petiit Dominum.
Ille ut agnus innocens non negavit Judae osculum.

Denariorum numero Christum Judaeis tradidit.

V.: Melius erat illi, si natus non fuisset.

Lectio VI - Resp.6

Unus ex discipulis meis tradet me hodie:
Vae illi per quem tradar ego.

Melius erat illi, si natus non fuisset.

V.: Qui intingit mecum manum in paropside,
hic me traditurus est in manus peccatorum.
Melius erat illi, si natus non fuisset.

Unus ex discipulis meis tradet me hodie.

Lectio IX - Resp.9

Seniores populi consilium fecerunt,
ut Jesum dolo tenerent, et occiderent:

聖週間の聖木曜日のためのレスポンソリウム(答誦)
『聖週間のための27のレスポンソリウム集』より
第二宵課

第4朗読に対する第4レスポンソリウム

私(イエス)の友(ユダ)は接吻の合図をもって私を引き渡した、

自分から接吻を受けた者を誰であろうと取り押さえる、と。

これが邪悪の合図となった。

つまり、接吻によって殺害を成し遂げたのだ。

〔答唱反復〕不幸な友は血の代価をそのままにし、そしてとうとうわなで自分の首を吊ってしまった。

〔詩唱〕彼のような人間は生まれなければ、彼にとってよかったのに。

第5朗読に対する第5レスポンソリウム

極悪の商人ユダは接吻をもって主を訴えた。

たとえあの罪の無い小羊がユダの接吻を拒まなかったにせよ。

〔答唱反復〕ユダヤ人の救い主を数デナリの銀貨と換えに引き渡したのだ。

〔詩唱〕生まれなければ、彼にとってもっとよかったのに。

第6朗読に対する第6レスポンソリウム

私の弟子の一人が今日私を引き渡すであろう。

あゝわざわざいなるかな、その男によって私は引き渡されるだろう。

生まれなければ、彼にとってもっとよかったのに。

〔詩唱〕男は私と一緒に手を小さな皿に浸している。

その罪の手で私を引き渡そうとするのであろう。

〔答唱反復〕生まれなければ、彼にとってもっとよかったのに。

私の弟子の一人が今日私を引き渡すであろう。

第9朗読に対する第9レスポンソリウム

〔答唱反復〕人々の長老たちが協議をおこなった、いかに陰謀を以てイエスを拘束して、殺すかと。

cum gladiis et fustibus exierunt
tamquam ad latronem.

V: Collegerunt pontifices et pharisaei concilium.

Jan Dismas Zelenka

Drei Responsorien zum Totenoffizium

I : Credo quod Redemptor meus vivit

Credo quod Redemptor meus vivit,

et in novissimo die de terra surrecturus sum.

Et in carne mea videbo Deum, Salvatorem meum.

Quem visurus sum ego ipse, et non alius ;

et oculi mei conspecturi sunt.

II : Qui Lazarum resuscitasti

Qui Lazarum resuscitasti a monumento foetidum,

Tu ei, Domine, dona requiem.

Tu ei, Domine, dona requiem, et locum indulgentiae.

Qui venturus es judicare vivos et mortuos,
et saeculum per ignem.

III : Domine, quando veneris

Domine, Domine, Domine, Domine.

Domine, quando veneris judicare terram,
ubi me abscondam a vultu irae tuae?

Quia peccavi nimis in vita mea.

Commissa mea pavesco, et ante te erubesco:

Dum veneris judicare, noli me condemnare.

Quia Peccavi in vita mea.

Requiem aeternam dona ei, Domine:

et lux perpetua luceat ei.

そこで、剣と棒を持って出て行った、
あたかも略奪者に従う如く。

〔詩唱〕 祭司長とファリサイ派が結合を図ったのだ。

葬儀のための3つのレスポンソリウム

私の信じるところでは、私を贖ってくださった
お方は生きておられて、

最後の日に私は塵からよみがえるのです。

〔答唱反復〕 そして、私の肉のうちに神を、私の
救い主を見るでしょう。

〔詩唱〕 そのお方に私が自らお目にかかろうとす
ること、それ以外に何もありません。

それで、私の眼が見えるようになりますように。

〔詩唱〕 あなたはラザロを悪臭の墓からよみがえ
らせたお方、

〔答唱反復〕 主よ、この人に安息をお与えください。
主よ、この人に安息を与えて、慈愛の余地
を施してください。

あなたは来られて、生ける者と死せる者を、
そしてこの世を、火によって裁こうとしておら
れます。

主よ！主よ！主よ！主よ！

主よ、あなたがこの世を裁こうと願われると
き、あなたの怒りの御顔から身をどこに隠し
たらよいのでしょうか？

〔答唱反復〕 なぜなら、私は自分の人生のあい
だに余りにも罪を犯したからです。

〔詩唱〕 私のかずかず犯した罪の心は震えだ
して、御前で顔を赤らめようとしています。
もし裁こうと願うのでしたら、私を有罪にし
ないでください。

自分の生涯のあいだに罪を犯したからです。

〔聖歌〕 主よ、この人にとこしえの安息をお
与えください。

また、何時までも絶えない光がこの人にさし
ていますように。

Leonhard Lechner

レオンハルト・レヒナー1593 作

**Historia der Passion und Leidens unsers
einigen Erlösers und Seligmachers Jesu Christi**

nach dem alten lateinischen Kirchenchoral
mit vier Stimmen componiert

Leonhard Lechner Werke Band12

「私たちのいく人かの救い主であり、至福を与えて
下さる方イエス・キリストの御受難とお苦しみの物語」

【古いラテン語の教会聖歌に基づいて4声で作
曲された。】

(『レオンハルト・レヒナー作品集』第12巻)

Erster Teil

Das Leiden unsers Herren Jesu Christi
aus dem Evangelisten Johanne.

Da Jesus solches geredt hatt,
ging er hinaus mit seinen Jüngern
über den Bach Kidron ;

Da war ein Garten,
in den ging Jesus mit seinen Jüngern.
Judas aber,der ihn verriet,wußte den Ort auch,

denn Jesus versammelt sich oft daselbst
mit seinen Jüngern.

Da nun Judas zu sich hatte genommen die Schar
und der Hohenpriester und Pharisäer Diener,
kommt er dahin mit Fakkeln,Lampen und mit Waffen.

Als nun Jesus wußte alles,was ihm begegnen sollte,
ging er hinaus und sprach zu ihnen:

„Wen suchet ihr?“

Sie antwortten ihm:

„Jesum von Nazareth. ”

Jesus spricht zu ihnen:

„Ich bins,“

Judas aber,der ihn verriet,stand auch bei ihnen.

Als nun Jesus zu ihnen sprach:„Ich bins, “
wichen sie zurück und fielen zu Boden.

Da fraget er sie abermals:

„Wen suchet ihr?“

Sie aber sprachen:„Jesum von Nazareth. “

Jesus antwortet:

„Ich hab euch gesagt,daß ichs sei:

suchet ihr denn mich,so lasset diese gehn. “

第一部

私たちの主イエス・キリストのお苦しみは、
『ヨハネによる福音書』によるとうである。

イエスはこのような事を話されてから、
御弟子たちと出て、

キドロンの溪流の向こうへ行かれた。

そこには園があつて、

イエスは御弟子たちとそこに入って行かれた。

しかし、イエスを裏切つたユダも、その場所を知つ
ていた。

と言うのは、イエスは同じ場所に時々
御弟子たちと集まれるからである。

折しも、はたしてユダは大勢の群衆と

大祭司とファリサイ派の下役を味方に引入れ、

たいまつ、ランプ、武器などを持ってその園に
入つて来る。

イエスは彼に出遭う事を何もかも知っておられた
ので、出て行かれて、彼らにこう話しかけられた。

「あなたがたはだれを捜しているのか。」

彼等はイエスに答えた。

「ナザレのイエスをだ。」

イエスは彼等にこう言われる、

「わたしである。」

ところが、イエスを裏切つたユダも、彼等に
加わつて居た。

はたしてイエスが「わたしである。」と言われた
ので、彼等は後ずさりして地に倒れた。

そこで、イエスは彼等に再びお尋ねになった。

「あなたがたはだれを捜しているのか。」

彼等はなおも、「ナザレのイエスをだ」と言った。

イエスはお答えになった。

「私はお前たちに『私である』と言つたではないか。
お前たちは私を捜しているのだから。それならこの
人々を去らせなさい。」

Da hatte Simon Petrus ein Schwert
und zog es aus
und schlug nach des Hohenpriesters Knechte
und hieb ihm sein recht Ohr ab.

Da sprach Jesus zu Petro:

„Steck dein Schwert in die Scheide!

Soll ich den Kelch nicht trinken,
den mir mein Vater gegeben hat? “

Die Diener aber bunden ihn
und führten ihn aufs erste zu Hannas.

Der fraget Jesum um seine Jünger
und um sein Lehre.

Jesus antwortet ihm:

„Ich habe frei öffentlich geredt vor der Welt,
ich hab allzeit gelehrt in der Schul und im Tempel;
frag die,so es gehöret haben !

Ein Diener aber,so dabei stund,
gabe Jesu einen Bakkenstreich und sprach:
„Sollst du dem Hohenpriester also antworten?“
Jesus antwortet:

„Hab ich übel geredt,so beweise es,daß' böses sei:

hab ich aber recht geredt,warum schlägst du mich? “

Und Hannas sandte ihn gebunden
zu dem Hohenpriester Kaiphas.

Zweiter Teil

Simon Petrus aber stund und wärmet sich ;

da sprachen sie zu ihm:

„Bist du nicht seiner Jünger einer? “

Er verleugnet aber und sprach:

„Ich bins nicht,Ich bins nicht. “

Und alsobalde krähet der Hahn.

Und Petrus gedacht der Wort Jesu
und ging hinaus und weinet bitterlich.

Jesum aber führten sie von Kaipha in das Richthaus.

Da ging Pilatus zu ihnen heraus und sprach:

このとき、シモン・ペトロは剣を持っていたので、
それを抜き放ち、

大祭司の雇い人に向かって切りつけ、
彼の右の耳を切り落とす。

そのとき、イエスはペトロに話しかけられた。

「あなたの剣を鞘に納めなさい!

私の父が私にお与えになった杯は、飲むべきではないのか。」

然るに、下役どもは彼を縛り、

そのあとで先ず、ハンナスのところに連れて行った。

ハンナスはイエスに彼の弟子のことや

その教えについて尋問した。

イエスは彼にお答えになった。

「私は世に向かって公然と話して来た。

シナゴグでも神殿でも教えて来た。

もしそれを聞いたことがあるのなら、その人々に尋ねてみるがよい!」

しかし、一人の下役が、傍に立っていたので、

イエスに平手打ちを一発くわせ、こう口を利いた。

「おまえは、大祭司様にそんな答え方をするのか?」

イエスはお答えになった。

「私が悪い事を話したのなら、私が悪いと言う事を証明しなさい。

「しかし、私が正しい事を話したのなら、なぜ私をひっぱたくのか。」

それから、ハンナスは彼を縛ったまま

大祭司カイアフアのもとに送った。

第二部

しかるに、シモン・ペトロは立ったまま、暖を取っていた。

すると、人々が彼に向かって話しかけた。

「おまえは彼の弟子の一人ではないのか。」

しかし、彼は否定してこう口走った。

「違いますよ、違いますよ。」

するとすぐに、雄鶏が鳴いた。

そして ペトロはイエスの言葉を想い出し、
出て行って、はげしく泣いた。

さて、人々はイエスをカイアフアのところから裁判所に連れて行った。

そのとき、ピラトは彼らのところに出て来て、
こう言った。

„Was bringet ihr für ein Klage über diesen Menschen?“ 「おまえたちはこの男についてどんな訴えを持ち込んだのか。」

Sie antworteten und sprachen: 彼らはこう答えて申し立てた。

„Wäre dieser nicht ein Übeltäter, 「この男が犯罪者でなかったら、
wir hätten dir ihn nicht überantwortet. “ 私どもはあなたに引き渡すようなことは
しなかったでしょう。」

Da rief Pilatus Jesu und sprach zu ihm: そこで、ピラトはイエスを呼んで、こう彼に
向かって語りかけた。

„Bist du der Juden König?“ 「おまえはユダヤ人の王なのか。」

Jesus antwortet: イエスはお答えになった。

„Mein Reich ist nicht von dieser Welt. “ 「私の王国はこの世のものではない。」

Da sprach Pilatus: すると、ピラトが語りかけた。

„So bist du dennoch ein König?“ 「では、おまえはやはり王なのか。」

Jesus antwortet: イエスはお答えになった。

„Du sagsts. 「あなたがそう言っているではないか。
Ich bin dazu geboren und in die Welt kommen, 私はそのために生まれ、この世に来たのだ。
daß ich die Wahrheit zeugen soll; それは、真理を証しするためである。
wer aus der Wahrheit ist, 真理から出た者は、
der höret meine Stimme. “ 私の声を聞く。」

Spricht Pilatus zu ihm: ピラトはこう彼に語りかける。

„Was ist Wahrheit?“ 「真理とは何か。」

Und ging wieder hinaus zu den Juden そして、ふたたびユダヤ人たちのところに出て
und sprach zu ihnen: 行って、こう彼らに述べた。

„Ich finde keine Schuld an ihm. 「私はこの男に何の罪も見出さない。
wollt ihr nun,daß ich euch der Juden König losgebe?“ さあ、お前たちは、私がおまえたちにユダヤ人の
王なる者を釈放してやることを望むのか。」

Sie schriegen all: 彼らは皆叫んだ。

„Nicht diesen,sondern Barrabam! “ 「その男ではなく、バラバを！」

Dritter Teil

Da nahm Pilatus Jesum und geißelt ihn,
und die Kriegs-knecht flochten eine Krone von Dornen
und setzten sie ihm auf sein Haupt
und legten ihm ein Purpurkleid an und sprachen:
„Sei gegrüßt,lieber Judenkönig! “
und gaben ihm Bakkenstreich.
Da führet ihn Pilatus heraus und sprach zu den Juden:
„Sehet,welch ein Mensch! “
Sie aber schriegen:
„Weg,weg,weg!Kreuzige,kreuzige,kreuzige ihn! “

第三部

そこで、ピラトはイエスを捕らえ、彼を鞭で
打ち、
兵卒たちがいばらで冠を編んで、
それを彼の頭に載せて、
紫衣を身に着けさせ、こう言った。
「よう、ユダヤの王さま君！」
そして、彼に平手打ちを食わせた。
そのとき、ピラトは彼を連れ出し、ユダヤ人
たちにこう言った。
「見よ、なんといい男ではないか！」
彼らはそれでも叫んだ。
「消えろ、消えろ、消えろ！十字架につけろ！」

Da sprach Pilatus:

„Soll ich euren König kreuzigen?“

Die Hohenpriester antworteten:

„Wir haben keinen König, allein den Kaiser!“

Da überantwortet er ihn, daß er gekreuzigt würde.

Sie nahmen aber Jesum und führten ihn hin,
und er trug sein Kreuz und ging hinaus zu der Stätte,
welche heißet Schädelstatt.

Da kreuzigten sie ihn

und mit ihm zweien andere zu beiden Seiten,
Jesum aber mitten inne.

Vierter Teil

Pilatus aber schrieb ein Überschrift
und heftet sie auf das Kreuz,
und war geschrieben hebräisch, griechisch
und lateinisch:

„Jesus von Nazareth, der Juden König.“

Die aber vorüber gingen, lästerten ihn
und schütteln ihre Häupter
und sprachen:

„Pfui dich, wie fein brichst du den Tempel
und bauest ihn in dreien Tagen;
hilf dir selbst!

Bist du Gottes Sohn,
so steig herab vom Kreuze!“

Fünfter Teil

Jesus aber betet und sprach:

„Vater, vergibe ihnen, denn sie wissen nicht,
was sie tun.“

Und als er seine Mutter sahe
und den Jünger dabei stehn,
den er lieb hatt, spricht er zu seiner Mutter:
„Weib, siehe, das ist dein Sohn!“

Danach sprach er zu dem Jünger:

„Siehe, das ist deine Mutter.“

十字架につけろ！十字架につけろ！」

すると、ピラトがこう語った。

「私は、お前たちの王を十字架につけなければ
ならないのか？」

大祭司はこう答えた。

「私たちに国王は居りません。皇帝陛下だけ
です！」

そこで、ピラトはイエスを引き渡して、彼が
十字架にかけられるにまかせた。

ところが、彼らはイエスを受け取ると彼を連行し、
イエスをご自分の十字架をお運びになって、
されこうべの場所と名づけられた処へ出て行った。

そこで、彼らはイエスを十字架につけ、
両側にほかの二人を彼と一緒につけた。
但し、イエスを中にして。

第四部

ところが、ピラトは一枚の見出し(罪状書き)を
書いて、それを十字架上に留めた。

そして、それはヘブライ語とギリシャ語と
ラテン語で次のように書かれてあった。

「ナザレのイエス、ユダヤ人の王。」

ところが、そこを通りかかった人々は、彼を冒
瀆して、その頭を振り振り、
こう話しかけた。

「この畜生め、お前が神殿をみごと打ち壊して
三日で建てるといふなら、
自分を救って見ろ！

お前は神の子なんだろう、
だったら、十字架から降りて来い！」

第五部

イエスはそれでも祈って、こう口にされた。

「父よ、彼らをお赦してください、彼らは
自分が何をしているのか知らないのです。」

そして、御自分の母が目に入り、
御自分が愛して来られた弟子が傍に立っている
のを御覧になると、御母に話しかけられた。
「婦人よ、ご覧なさい、この人はあなたの息子
ですよ！」

次に弟子に向かって、話しかけられた。

「ご覧なさい、その人はあなたのお母さんです。」

Der Übeltäter aber einer, so zu seiner Rechten hänget,
sprach zu ihm:

„Herr, gedenk an mich, wann du in dein Reich kommest!“

Und Jesus sprach zu ihm:

„Wahrlich, wahrlich sag ich dir,
heut wirst du bei mir sein im Paradiese.“

Daß aber die Schrift erfüllet würde, sprach er:

„Mich dürstet.“

Sie aber reichten ihm Essig in einem Schwamm.

Und Jesus schrie laut und sprach:

„Eli, Eli, lama asabthani?“

Das ist: „Mein Gott, mein Gott,
warum hast Du mich verlassen?“

Und wiederum sprach er:

„Es ist vollbracht.“

Und abermal rief er laut:

„Vater, in deine Hände befehl ich meinen Geist!“
und neigte das Haupt und verschied.

Der Du für uns gelitten hast,
erbarme Dich unser, o Jesu!

ところが、彼の右に架かっていた一方の犯罪人が、彼に向かって話しかけた。

「主よ、あなたが御国においでになるときには、私の事を思い出してください！」

すると、イエスは彼に向かってこう話された。

「まことに、まことにあなたに言って置く。

今日、あなたは樂園で私のそばに居るであろう。」

だが、(聖書に書かれた) 御言葉が成就して、彼は「私はのどが渴いた」と口走られた。

しかるに、彼らは海綿に酢を浸して彼に差し出した。

すると、イエスは大きく叫んで、こう口走った。

「エリ、エリ、ラマ、アサブターニ？」

これはすなわち「我が神、我が神、
どうしてあなたは、私をお見捨てになるのですか。」
という意味である。

そして、さらにもう一度こう口にされた、

「成し遂げられた」と。

だが、またしてもこう大声で呼ばれた。

「父よ、あなたの御手に私の霊をゆだねます！」

そして、頭を垂れて、この世を去られた。

そのあなたが私たちのために苦しみを受けられたのです。私たちをお憐れみください、おお、イエスさま！

(訳詩 野口 碩)

東京アマデウス合唱団のご案内 (2006.11 現在)

少人数に適したルネッサンスやバロック時代の宗教曲を積極的に取り上げて、他の合唱団ではあまり歌うことの無い隠れた名曲を歌ってみたい方をお誘いしており、来年は没後 300 年となるブクステフーデの曲で全ステージを演奏したいと考えております。

今後の活動予定は下記の通りですが、少人数のバロックのアンサンブルと一緒に楽しみたい方や興味のある方が居られましたら、是非一度下記の練習会場にお出掛け頂き、見学だけでも大歓迎ですので練習状況等をご覧頂きたいと願っております。

下記ホームページをご参照の上、「護国寺」の同仁キリスト教会内の「美登里幼稚園」へお出掛けいただきたく、団員一同期待してお待ちしております。

(事務局 大久保ルミ子)

<http://homepage2.nifty.com/Amadeus/>

今後の予定

予 定 2007 年 10 月 8 日(祝・月)

予 定 カトリック麻布教会

演奏曲目 没後 300 年を記念し「ブクステフーデ」の作品を予定

参加ご希望の方へ

お問い合わせ先 辻村順子 048-476-4056
大久保ルミ子 03-3960-7714

練習日 毎週水曜日 午後 6 時半～9 時

練習場所 同仁キリスト教会美登里幼稚園 2F

指導者 水野克彦

会 費 月 額 4 千円(学生 2 千円)
入会金 1 千円

(練習場所への交通案内)右図参照

* 地下鉄有楽町線

「護国寺」駅下車 6 番出口から徒歩 5 分

* JR 山手線「目白」駅より

都バス「椿山荘」または「新宿西口」行きで
「目白台 3 丁目」下車 徒歩 3 分



演奏会の記録

	開催年月	主な演奏曲目	指揮
第1回	1981.02	モーツァルト(レクイエム<ジュスマイヤー版>、アヴェ・ヴェルム・コルプス)等	寺村博司
第2回	1981.11	ヘンデル(メサイア)	渡辺央己
第3回	1982.22	フォーレ(レクイエム)、ジョスカン・デプレ、シュッツ等	鈴木 優
第4回	1983.09	モーツァルト(戴冠式ミサ、ミサ・プレヴィイス 220)、ヴィクトリア等	黒岩英臣
第5回	1984.09	モーツァルト(レクイエム<ジュスマイヤー版>、ミサ・プレヴィイス 194)	黒岩英臣
第6回	1985.10	J.S.バッハ(カンタータ 106)、ブクステフーデ、ハスラー	宮本昭嘉
第7回	1986.10	モーツァルト(グローセ・ミサ)、ヴィクトリア(アヴェ・マリア)等	鈴木 優
第8回	1987.10	シュッツ (ムジカーリッシェ・エクセクイエム)、ハスラー(ミサ・セクンダ)	鈴木 優
第9回	1988.12	モーツァルト(ヴェスペレ 339)、F. J. ハイドン(ミサ・プレヴィイス)等	齋藤明生
第10回	1989.11	モーツァルト(レクイエム<バイヤー版>、ミサ・プレヴィイス 140)	齋藤明生
春の小演奏会	1990.05	ジョスカン・デ・プレ(パンジェ・リングワ)、ハスラー等	齋藤明生
第11回	1991.02	モーツァルト(リタニア 243)、J.M.ハイドン(ヴェスペレ)	齋藤明生
第12回	1991.11	モーツァルト(ドミニクス・ミサ、サンクタ・マリア・マーテル・デイ)等	齋藤明生
第13回	1992.11	シャルパンティエ(真夜中のミサ)、シュッツ、ブクステフーデ等	齋藤明生
第14回	1993.11	モーツァルト(ミサ・プレヴィイス 275)、アルブレヒツベルガー	齋藤明生
15周年記念	1994.11	モーツァルト(レクイエム<ドルース版>、等)=渋谷混声と合同	齋藤明生
第15回	1995.10	J.S.バッハ(カンタータ 182)、ブクステフーデ(ミサ・プレヴィイス)等	齋藤明生
第16回	1996.11	モーツァルト(ヴェスペレ 339)、アルブレヒツベルガー等	齋藤明生
第17回	1997.10	モーツァルト(ミサ・ソレムニス 337、テ・デウム・ラウドムス)等	齋藤明生
第18回	1998.10	J. S. バッハ(カンタータ 61,196)、D. スカルラッティ	齋藤明生
第19回	1999.10	ラインベルガー(スタバト・マーテル)、J.M.ハイドン等	齋藤明生
齋藤先生追悼	2000.07	ハスラー(ミサ・セクンダ)、F.メンデルスゾーン、ホミリウス等	水野克彦
クリスマス	2000.12	四つのアヴェマリア(アルカデルト、ジョスカン・デ・プレ、ヴィクトリア、パレストリーナ)等	水野克彦
第20回	2001.11	モーツァルト(トリニターティス・ミサ)、F. J. ハイドン等	水野克彦
第21回	2002.10	ドイツ・バロック(J.C.F.バッハ、シュッツ、ブクステフーデ)	水野克彦
第22回	2003.11	ラインベルガー(スタバト・マーテル)、アルブレヒツベルガー	水野克彦
第23回	2004.10	D. スカルラッティ、パレストリーナ、モンテヴェルディ	水野克彦
第24回	2005.11	シュッツ、テレマン、ブクステフーデ (カンタータ)	水野克彦
第25回	2006.11	L. レヒナー(受難曲)、J.D.ゼレンカ(洗足木曜日のためのレスポンソリア等)	水野克彦

Colony Amadeus Thoms

SINCE 1980